かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

稲 讃 分 教 会

昭和59年４月26日　設立
昭和59年５月８日　鎮座祭
昭和59年５月９日　奉告祭

本年の活動目標

「おぢばがえり」

・「喜びいっぱいのおたすけ」を目指し、さあ、おぢばに帰ろう 。
・「人だすけのおぢばがえり」を通して、ぢば一つに心を寄せよう。

立教185年
11月号

秋季大祭講話

「諭達」を真正直に受け止めたすけ一条につとめきろう

世話人 島村廣義先生

立教185年大教会秋季大祭は10月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら参拝のもと執り行われた。

ご参拝くだされた世話人・島村廣義先生は、『諭達第四号』発布を目睫に控えた秋季大祭にあたり、まず、本年の歩み方を振り返られ、続いて、明年迎える教祖140年祭三年千日活動に向かっての心構えを整えるうえから、教祖年祭の意義に続いて、根本教理の角目を縷々お話しくださった。講話内容は次の通り。

なお、笠岡大教会では、直轄教会の秋季大祭参拝において、それぞれの教会で「年祭活動三年間の達成目標」と「御守護を頂くための理作り、実践項目」を定めるよう打ち出しがなされている旨を伝え、〝教祖にお喜び頂くには、今何をすれば良いのか〟を思案し、その上で、教会一丸となって取り組めるようしっかりと相談してこの「目標」と「実戦項目」を決めるよう促したが、図らずも、島村先生から〝教祖にお喜び頂くには、今何をすれば良いのか〟の思案材料をご提供くださったものと拝察する。

▼本年の位置付け

今年の年頭のごあいさつで、真柱様は、「教祖の年祭」について、

十年に一度、年祭を勤めるということになれば、一八九年が教祖百四十年祭。ということは、もう来年には、百四十年祭を目指す三年千日という動きに入っていくわけであります。

私は、道を伸展させるためには、いろいろな意味において、教祖の年祭を勤めることは大切なことであると思いますので、次の百四十年祭は勤めさせていただきたい

（中略）教祖の年祭を勤める意味を徹底させることは、本当に難しいことだとあらためて思います。やはり、伝える側の責任は大きい（中略）伝える側の姿勢としては、信仰姿勢、普段から教祖の教えられたことを身に行い、なるほどの人になる努力をすることを怠（おこた）ってはならないと思います。その人の信仰から伝わるということは、やはりある（みちのとも185年2月号5頁）

と述べられました。

さらに、「教祖百四十年祭三年千日を前に、いま教会長としてすべきこと」と題して、両統領インタビューが、『みちのとも』に掲載され、表統領が、年祭活動に向かうにあたって、まず道の先達である教会長が何をすべきか考えていくうえでのポイントを、３つ挙げておられます。

一つ目は、なぜ教祖の年祭を勤めるのか。年祭活動に取り組むうえで根本となる教祖年祭の意義を、教会長として、しっかり心に治めることをしなければいけない

二つ目は、お預かりしている教会の現状、現在の姿を、しっかり確認・把握すること（中略）長い目で、自分とお預かりする教会の将来の姿を思い描いて、それを実現していけるように順序だてて進んでいこう（中略）百四十年祭は、そうした目標に向かうための一つの節目

三つ目は、年祭活動に向けての心構えをつくって準備する（中略）厳しく通る覚悟というか、腹を据え（中略）どうでも三年千日をつとめきる覚悟、心構えを

（みちのとも185年6月号9頁）

する。教会長の心構え・覚悟をよふぼく・信者に移していく、と。

この真柱様のお言葉なり、両統領のこの対談を受けて、今日まで、活動を続けてきました。

▽「諭達」は「刻限のさしづ」

そして、いよいよ、この10月26日、真柱様から『諭達第四号』をご発布いただきます。

この「諭達」というのは、お道の節目にあたって、真柱様が教内に対して時旬の理にふさわしい信仰と実践について教示されるものです。

おさしづに、

鏡やしきから打ち出す言葉は、天の言葉である程に。理を恐れず、あんな事言う、あんな事と思えば、あんな事になる。めん〳〵身上もあんな事になる程に〳〵。

（明治32・2・2）

と仰せいただきますが、「諭達」は、まさに「鏡やしきから打ち出されるお言葉」であり、私たちにとっては、今日の「刻限のさしづ（註）」とも言うべき、同様の重みを持って受け止めさせていただかなければならない、大切なお言葉であると、私は思案します。

註）親神様のほうから、その時々に応じて神意を述べられたものを「刻限のさしづ」といい、人間の側からの伺うかがいに対して答えられたものを「伺いのさしづ」という。

私たちは、「諭達」を、素直に、真正直に受け止め、全教が心をひとつに揃え一手一つに、三年千日仕切って、思召にお応えさせていただく道を、ひたすら歩み進めさせていただきたいと思います。

▼「教祖年祭」の意義

▽教祖 存命の理

そこで、私は、本日、あらためて、「教祖の年祭」をつとめることの意味を振り返り、教祖の親心にしっかりお応えさせていただけるよう、自らの心を定めたいと思います。

「教祖の年祭」は、私たちの親や先祖の年祭のように、親戚や親しかった者が集まって、故人の遺徳をたたえたり人柄を偲んだりするものではありません。

さあ〳〵これまで住んで居る。何処へも行てはせんで、何処へも行てはせんで。日日の道を見て思やんしてくれねばならん。

（明治23・3・17）

と仰せられる通り、教祖は、存命の理をもって今も変わることなく元のやしきに留まり、世界だすけの道の先頭にお立ちくだされ、

月日にハせかいぢうハみなわが子
かハいいゝばいこれが一ちよ　一七16
月日にハせかいぢうゝハみなわが子
たすけたいとの心ばかりで　八4
いちれつのこともがかハいそれゆへに
いろ〳〵心つくしきるなり　四63

と、すべて子供可愛いうえの、どこまでも限りない隔てないたすけ一条の親心でお見守り、お導きくださっています。

私たちは、教祖からお掛けいただく親心をしっかり受け止めて、思召に沿わせていただき、教祖のひながたの道を真剣に歩み、陽気ぐらし世界の実現を目指して、たすけ一条につとめきらしていただくこと、これが、教祖にお喜びいただく何よりもの道です。

▽教祖年祭の元一日
――意欲的なたすけ一条の全開

「教祖の年祭」をつとめる根本は、元は、子供の成人を急き込み促されるうえから教祖が定命を25年お縮めになり現身をお隠しになられた、明治20年陰暦正月26日の事情に由来します。

それは、世界一れつをたすけるために一日も早く陽気づくめの世の状に立て替えてやろうと思召す親心から、たすけ一条の道として教えられた「おつとめ」を誰に気兼ねすることなく十分につとめられるようにしてくださったこと、また、誰はばかることなく、世界の人々に「おたすけ」・「布教」ができるようにしてくださったことです。

教祖の切迫する身上を台にして、たすけ一条のつとめの勤修を急き込み促されるとともに、あらゆる人間思案を断ちきり、ひたすら親神様を信じ凭れきって通る「神一条」の道の通り方を、厳しくお仕込みくださいました。

御伝に当時の様子を拝察しますと、

その日の正午頃から、教祖のお身上がいよ〳〵迫って来たので、一同全く心定まり、眞之亮から、おつとめの時、若し警察よりいかなる干渉あっても、命捨てゝもという心の者のみ、おつとめせよ。と、言い渡した。一同意を決し、下着を重ね足袋を重ねて、拘引を覚悟の上、午後一時頃から鳴物も入れて堂堂とつとめに取り掛った。

（教祖伝 十章329頁）

と、初代真柱様を芯に、先生方が真剣に命懸けでおつとめをつとめられた様子が記されています。

続いて、

陽気な鳴物の音を満足気に聞いて居られた教祖は、丁度、「だいくのにんもそろひきた」という十二下りの最後のお歌の了る頃、一寸変ったそぶりをなさったので、お側に居たひさが、お水ですか。と、伺うた処、微かに、

「ウーン」

と、仰せられた。そこで水を差上げた処、三口召し上った。つゞいて、おばあ様。と、お呼び申したが、もう何ともお返事がない。北枕で西向のまゝ、片手をひさの胸にあて、片手を自分の胸にのせ、

スヤ〳〵と眠って居られるような様子であった。（教祖伝十章330頁）

と、教祖が現身を隠されたときのご様子が記されています。

仰せ通りにおつとめをつとめたので、きっと教祖はお元気になられたと思われたであろう先生方ですが、しかし、

つとめを無事了えて、かんろだいの所から、意気揚々と引き揚げて来た一同は、これを聞いて、たゞ一声、「ワーッ」と悲壮な声を上げて泣いただけで、あとはシーンとなって了って、しわぶき一つする者も無かった。（中略）

人々は、全く、立って居る大地が砕け、日月（じつげつ）の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じた。（教祖伝十章332頁）

と、先生方の驚愕・落胆された様子が記されています。

官憲の迫害・干渉・弾圧の中、仰せ通りに「おつとめ」をつとめると、教祖に直接ご苦労をお掛けする。そのご苦労を思うと、なかなか「おつとめ」に踏みきれなかった先生方のご苦衷は、私たちの想像以上のことだと思います。

教祖のご身上を台として、

さあ、今と言うたら今直ぐに掛れ。（中略）悠長な事を言うて居る場合ではない。一体、お前達は法律が怖いのか。をやの話が尊いのか、どちらに重きを置いて信心をして居るのか（教祖伝十章328頁）

と、つとめの決断を促される、厳しいお仕込みに、一同、心を定め、差し迫る教祖の身上から、命捨ててもとの覚悟のもとにおつとめをつとめました。

その結果、教祖が現身を隠されるという事態になってしまいました。嘆き悲しみは一通りのことではなかったでしょう。内蔵の2階で飯降伊蔵先生を通しておさしづを伺われると、

さあ〳〵ろっくの地にする。皆々揃うたか〳〵。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めてろっくの地に。扉開いて、ろっくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うように子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。よう聞いて置け。（教祖伝十章333頁）

とのお言葉でした。

まさか、「扉を開く」と仰せくださる事が「教祖が現身を隠される」ことを意味しているとは思いもしなかった先生方は、

扉を開いてろくぢにならし被下（くだされ）たい。（教祖伝十章325頁）

とお答えになり、親神様はその返事をお聞き届けになって、心通りに守護くださったのです。

しかし、このことによって見せられた姿は、親神様の思召と人々の心との間の大きな隔たりによって、25年先ある定命を縮めて現身を隠される結果になったのではと思案します。

子供可愛いうえの親心ならではのお心配りで、子供の成人を促されるとともに、現身を隠されることによって、「おつとめ」をつとめることに踏みきれなかった原因を取り除かれ、今からいよいよ、世界を駈け巡ってたすけをする。しっかり見て居よ。今迄とこれから先と、どう違うて来るか確（しっか）り見て居よ。（中略）さあこれ迄から、子供にやりたいものもあった。なれど、思うように授ける事が出来なかった。これから先、だん〳〵にその理を渡そう。（教祖伝十章334頁）

とて、広く一般に「おさづけの理」をお渡しくださるとともに、積極的な世界だすけの道、たすけ一条の道の全開（註）をお促しくだされたものと思案します。

註）全開：全力で行うこと。もっている力を最大限に出すこと。

▽神一条の精神定め

その後、先人たちは、教祖がご存命でお働きくださっていることを信じ、教祖の親心に全身全霊を捧げてお応えしたいとの固い信念で、おたすけに奔走し、全国各地でおさづけの取り次ぎに真実を尽くすなか、次々と不思議珍しいご守護をいただきました。

教祖10年祭が執行された明治29年には、お道は全国津々浦々まで伸び広がり、教会も全道府県（註）に設置され、

布教戦線は海外にまで及びました。

註）東京が「都」になったのは昭和18年。

それは、懸命におたすけに奔走した人々の真実を、教祖がお受け取りくださりお働きくだされた結果であり、教祖ご存命のお働きに他なりません。

教祖のお姿は拝せなくともご存命でお働きくださっているとの確信・感激はさらなるたすけの輪となって広がっていきました。

以後、10年ごとの「教祖の年祭」を仕切りとして、成人の歩みを進め、教祖にお喜びいただきたいと、懸命に歩んできたお道です。

「教祖の年祭」の元一日を振り返り、あらためて教祖のお急き込みは、たすけ一条の道の根本である「つとめの実行」にあったこと、さらに親神様の思召に沿いきる「神一条の精神定め」であったことを思案すると、私たち自身が、人間思案に流れ、神一条に徹しきれないことで、教祖にもどかしい思い残念の思いをお掛けしている、その自らの歩みを顧みて反省することの多いことに、気づきます。

先人・先輩の先生方は、神一条の道と世間一般・世上の道との狭間で、どのように進めば良いのかを、常に教祖のひながたに求め、思案を重ね、をやの思いに近づく努力を繰り返し繰り返し続けて通られたなかに、見事、節から芽が出るご守護を頂戴してこられました。

それは、今、これから教祖140年祭活動に向かって道を歩む私たちにとっても、成人の足取りを進めるうえに学ばなければならない尊い道すがらであると思います。

教祖がご存命でお働きくださっている、その親心に凭れきり、いかなる困難ななかも勇んでお通りになった先人に倣い、親神様の思召に添いきって、ご存命の教祖にお喜びいただけるよう、確固たる神一条の精神を定めて、歩み抜かねばならないと思います。

▼根本教理の再確認

▽親神・天理王命

親神様・天理王命様は、この世・人間世界をお造りくだされた「元の神様」、火・水・風を始め、人間身の内の温み・水気・息一筋に至るまでこの世の一切、すべてをご守護くださる「実の神様」です。

人間が生きるうえに必要なあらゆるものを整えて、命を与えられ、陽気ぐらしのできるようにご守護くださっています。

・かしもの・かりもの

おふでさき第三号40・135に、

たんくとなに事にてもこのよふわ
神のからだやしやんしてみよ　三40・135

とあり、続いて、それぞれ、

にんけんハみなく神のかしものや
なんとをもふてつこているやら　三41
めへくのみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん　三137

と、「かしもの・かりもの」の理が説かれています。私は、ここに親神様の深い思召があるように思案します。

世の中のものは、すべて、親神様のお造りくだされたもの、全宇宙は親神様のお体である。したがって、人間もすべて、自分の力でできたものではなく、親神様のお造りくださったものを、親神様から貸していただいて、この天地抱き合わせの親神様の懐で、親神様のご守護によって生かされていると教えられます。

この「かしもの・かりもの」のご教理が分からなければ何も分からないと教えられますが、別の言い方をすると、この「かしもの・かりもの」のご教理が心に治れば、すべて分かってくるということでしょう。――親神様のご存在はもとより、親神様の十全のご守護、私たち人間の生きる目的、その生き方など、教えのすべてが分かってくるということです。

「かしもの・かりもの」の理が教えの台とお教えいただく所以（ゆえん）はここにあると思います。

・自由（じゆうよう）自在の理――「当たり前」こそは、親神様の守護

この世に生を享け、日々結構に暮らすことができるのは、親神様の温かい懐で絶えず守られているからです。

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々出る。どんな理も受け取る中に、自由自在という理を聞き分け。

（明治22・2・14）

と仰せいただきます。

日々、元気に、何不自由なく、体を使える喜び、今日も一日、結構に過ごせた。――私たちは「当たり前」と思っている日々のくらしこそ、親神様のありがたくもったいないご守護であるこ

とに気付くことで、「かしもの・かりもの」のありがたさ、生かされている喜びを味わえるのです。

・陽気づくめの境地

また、この喜びは、一見、喜べないことと思われるなかにも味わうことができるのです。

教祖は、「貧に落ちきれ」との親神様のお言葉のままに、苦心の道中を子供たちとともにお通りくださり、食べるに米のない日を過ごされるなか、

「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。」

（教祖伝三章40頁）

と、子たちを励ましながら通られました。

親神様のご守護に気付くことによって、どんな中でも、心一つで喜べることを教えられているのです。

私たちの身の回りには、身上や事情など、思うようにならないことで心を曇らせ、喜べないことも沢山ありますが、しかし、「かしもの・かりもの」のご守護、親神様が大難を小難に小難を無難にご守護くださっていること、さらには、見せられる節に込められた親心に気付くことで、

今まで喜べなかったことも、心から喜べるようになり、今まで楽しめなかったことも、心から楽しめるようにな

（教典六章63頁）

れるのです。

▽ぢばの理

・おやさと・やしき

別席のお話の中で、次のようにお取次ぎくださいます。

このやしきは元々親神様が紋型ないところから、人間世界をお創めくだされた因縁あるやしきでありまして、その宿し込みの証拠としてお据えくだされるのがかんろだいであります。

すなわちこのやしきは、世界中の人間の元の親里であります。

親里であるばかりでなく、現に、元なるをやであらせられる親神様がお鎮まりくだされ、月日のやしろ、ひながたのをやであらせられる教祖が存命同様ここでお見守りくだされているのでございます。

世界からおぢば、をやの側と言うて慕うて帰る子供に、隔てなくお待ちかねになっているのがをやのお心であります。

このをやを慕うて帰る子供の真実が、常に隔てなく子供のうえを思うて、その帰りをお待ちくだされるをやのお心に通いまして、ここに珍しいたすけをお見せくだされ、自由のご守護をなしくだされるのでありますから、この元のぢばへ真実の心を運ぶのが肝心であります。

・てびき

この世・人間世界をお造りくだされた「元の神様」、すべてを守護くだされる「実の神様」――親神様がお鎮まりくだされ、月日のやしろ・ひながたの親であらせられる教祖がお出でくださる、親里・ぢば、このたすけの源であるぢばを慕うて帰らせていただくのが、おぢばがえりです。

自らの身上・事情の、あるいは、人様のおたすけを願っておぢばがえり、さらには、おたすけいただき結構にご守護いただいたことへのお礼のおぢばがえりなど、おぢばがえりの理由は、人それぞれに違いがありましょう。

また、人の勧めや自らの意志でと思うかもしれませんが、しかし、おぢばへ帰ることは、たとえ、その理由が何であれ、そこには、親神様の思召・深い思惑があってのお引き寄せなのです。

『逸話篇』に、

神に深きいんねんあるを以て、神が引き寄せたのである程に。

（逸話篇11）

「さあ〳〵いんねんの魂、神が用に使おうと思召す者は、どうしてなりと引き寄せるから、結構と思うて、これからどんな道もあるから、楽しんで通るよう。用に使わねばならんという道具は、痛めてでも引き寄せる。悩めてでも引き寄せねばならんのであるから、する事なす事違う。

（逸話篇36）

というお話があります。

・ご恩報じ

また、教祖は、思召あってお引き寄せになった人には、「おたすけいただきたい」と初めておぢばへ帰った人たちにも、にをいがけ・おたすけ・布教の実践を促されています。

「心配は要らん要らん。家に災難が出ているから、早ようおかえり。かえったら、村の中、戸毎に入り込んで、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。」

（逸話篇42）

と仰っています。

おたすけを願っておぢばに帰った人に、たすけていただく道として、神様の話をしてにをいがけすること、神名を唱えておつとめをすること、祈ることを教えられ、

「金や物でないで。救けてもらい嬉しいと思うなら、その喜びで、救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。」

（逸話篇72）

と、ご恩報じの道を教えられました。

さらに、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」（中略）

「これは、御供やから、これを、供えたお水で人に飲ますのや。」

（逸話篇100）

と、おたすけの仕方、御供やご神水を戴かせて人をたすけること、たすけて回ることを、促されました。

・つくし・はこび

さらに、

この屋敷は、用事さえする心なら、何んぼでも用事がありますで。用事さえしていれば、去のと思ても去なれぬ屋敷。せいだい働いて置きなされや。先になったら、難儀しようと思たとて難儀出来んのやで。今、しっかり働いて置きなされや。

（逸話篇37）

と、おぢばがえりとともに、ぢばに誠真実・真心を尽くし運ぶこと、伏せ込むことがいかに大切なこと、大事なことかということも、教えられました。

先人たちは、おたすけいただきたい一心で、おぢばに帰り、教祖のお導きのまま、親心にお縋りして、素直に道を通られた結果、それぞれに不思議な珍しいたすけのご守護を頂き、その感激と喜びに、ご恩報じのたすけ一条の道を歩むようになったのです。

お道に間無しの方々であっても、お引き寄せになったその深い思召があればこそ、たすけ一条の御用に使われるのです。

今日の私たちは、親々からの信仰を受け継ぎ、原典や教典・御伝によって、いつでも親神様の思召を拝することができ、教祖のひながたを求めることができる結構をお与えいただいています。

入信間無しの先達のご苦労を思えば、今日の姿はありがたいことばかりです。

親神様のみ教えを学び、少しは道を聞きわけているお互いは、いまだ親神様を知らず、親神様の思召も分からずに、身上や事情に悩み苦しんでいる人々に、一日も早く、み教えを伝えることは、私たちよふぼくのつとめです。

先人たちの素直に教祖のひながたを求めてお通りくだされた道すがらに倣って、積極的なおたすけを心がけて、一人でも多くの方々をおぢばにお連れ帰りさせていただき、教祖にお喜びいただきたいと思います。

▽たすけ一条の道

・つとめ――たすけの元立て

教祖は、世界一れつをたすけたいとの親心で私たちをお見守りくだされ、たすけ一条の道として、つとめを教えられ、さづけを渡されてその実行を促されています。

みかぐらうたに、

ようこそつとめについてきた
これがたすけのもとだてや　六下り目4
いつもかぐらやてをどりや
すゑではめづらしたすける　六下り目5

おつとめは「たすけの元立て」と教えられますが、人だすけの元立てあるとともに、自分自身もたすけていただける元です。――おつとめは親神様ののつとめであり、親神様は元の神・実の神様、その元を立てるのが「元立て」、元を立てるので、お互いの身が立つという意味です。

にちくにはやくつとめをせきこめよ
いかなるなんもみなのがれるで　一〇19
とのよふなむつかしくなるやまいでも
つとめ一ぢよてみなたすかるで　一〇20
つとめさいちがハんよふになあたなら
天のあたゑもちがう事なし　一〇34
はやくと心そろをてしいかりと
つとめするならせかいをさまる　一四92
つとめてもほかの事とわをもうなよ
たすけたいのが一ちよばかりで　一六65

と教えられます。

おつとめはたすけ心を持ってつとめる。人々の身上・事情を始め、ところの治まり世界の治まり、すべてよろづのたすかりを親神様に願う。おさづけの取り次ぎができないときでも、おつとめによって親神様にたすけを願うことができます。

教会でつとめるおつとめは、ぢばでつとめられるかぐらづとめの理を受けてつとめます。よろづだすけの源であるぢばの理を戴いてつとめる教会でのおつとめは、おつとめ奉仕者を揃えて、道具を揃えて、ぢば一つに心を揃えて、一手一つに、教え通りに、おたすけの心を込めて、勇んで、人々のたすかり、世の中の治まりを願ってつとめることが大切です。

・さづけ――生涯末代の宝

さらにまた、身上に苦しんでいる人々には、真実込めておさづけの理を取り次がせていただくのです。

おかきさげに、

人を救ける心は真の誠一つの理
で、救ける理が救かる

と教えられます。

逸話に、

「救からんものを、なんでもと言うて、子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実なら神が受け取る。」

と、仰せ下された。

この有難いお言葉を頂戴して、キクは、救からん命を救けて頂き、八十八才まで長命させて頂いた。

（逸話篇16）

と記されていますが、これは、桝井伊三郎先生が、病気で苦しんでいる母親の姿に「どうでもたすけてもらいたい」・「ならん中をたすけていただきたい」と50町の道のりを、何度もおたすけを願われた誠真実に対しての、教祖のお言葉です。

「見ておれない」・「放っておけない」・「たすけていただきたい」・「たすけたい」――この「何でもどうでも」のたすかってもらいたいという真実とその行為こそが、親神様にお受け取りいただく誠真実です。

この「何でもどうでも」という止むに止まれぬおたすけ心がなかったら、「おたすけ」はできません。

たんくとよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで　一五60
このよふをはじめたをやか入こめば
どんな事をばするやしれんで　一五61

とお教えいただきます。

おさづけは人だすけのための宝です。

何としてもたすかっていただきたいとのおたすけ人の真実誠の心に、親神様・教祖がお働きくだされるのです。

また、このおさづけの取り次ぎによって、教祖がご存命でお働きくださっていることのありがたさを実感することができるのです。

よふぼくは、この尊いおさづけの理を頂戴した元一日の心を忘れることなく、病む人に、期を逃さず、躊躇することなく、積極的に、おさづけを取り次ぎましょう。

・にをいがけ・おたすけ

年齢・性別・立場に変わりなく、自分にできるおたすけを見出し、いつでもどこでもおたすけを心掛けましょう。

自分の身の回りを見渡し、誰とでも挨拶を交わす。――気さくに声を掛けることから始めるのです。そして、それを毎日続ける。

「無縁社会」と言われる昨今、また、コロナウイルスの蔓延で人との繋がりがなく寂しい思いを味わっている人が多い。しかし、概して、人は、自分の抱えている悩みや苦しみについて、他人に隠すことが多いので、それを他人に打ち明ける人は少ない。一度や二度の声掛けぐらいでは、容易に心を開いてもらえないので、私たちは、その人たちの悩みや苦しみを、案外、見過ごしがちです。常に、教えを実践し、親しく声を掛け続け、自分を信用してもらえるまでの人間関係ができるに従って、だんだんと、悩み事の相談を持ちかけられるようになるのです。

困っている人に出会えば、徹底したおたすけの心で、誠心誠意、世話をし、相手の心に寄り添い、悩みに耳を傾け、相手の心の悩みや苦しみを思いやり、分かち合うのです。

また、心に不安を抱え、塞ぎ込む人々には、親神様を信じ凭れて通る、そのありがたさを伝え、心の向きが変わるように導くのです。

相手の身になり、分かりやすく心を砕いて、根気よく導くことが大切です。

そしてさらには、共々に人だすけに向かうまでに丹精させていただきたいものです。

・つくし・はこび

日々に頂戴する限りない親神様のご守護に対しての報恩感謝の行いは、ひのきしんと教えられますが、このご守護に対するお礼・感謝のつくし・はこびとともに、常々、おたすけのご守護を頂戴するためには、しっかりとぢばに心を繋ぎ、真実・真心を尽くし運ぶことが大切です。

先人たちの道すがらを振り返ると、そこにはご守護を願い、縋る思いで、大勢の方々がおぢばに運ばれた姿がありました。

残らずぢばから救ける。万事何から大切、第一のたすけ、ぢばより救ける。（明治24・1・23）

ぢばは親神様のお鎮まりくださるところ、ご存命の教祖のお出でくださるところ、たすけの源です。たすかる理は、このぢばにしっかりと繋がるところからお与えいただくのです。

やしきハかみのでんぢやで
まいたるたねハみなはへる　七下り目8
心さい月日しんぢつうけとれば
どんなたすけもみなうけやうで　八45
とのよふなたすけとゆうもしんちつの
をやがいるから月日ゆうのや　八46
この月日もとなるぢばや元なるの
いんねんあるでちうよぢさいを　八47

ぢばへ尽くし運ぶ私たちの真実を、親神様は必ずお受け取りくださり、真実にふさわしいご守護をくださるのですから、しっかりぢばに尽くし運ぶことです。

・誠一つの理

人をたすける心、それは誠の心です。――それは、思召に沿い、天理にかなう心だからです。

このさきハせかいぢうハ一れつに
よろづたがいにたすけするなら　一二93
月日にもその心をばうけとりて
どんなたすけもするとをもゑよ　一二94
しんちつに心にまことあるならば
どんなたすけもちがう事なし　一三71

おたすけに際して、人の悩みや苦しみに出合ったとき、じっとしておられず、自分のできることなら、どんなことからでも手を差し伸べて、精一杯の真実を尽くす。

親神様はこの誠真実を直ぐと受け取って、いかなるたすけも引き受けられます。

自分の心に、この誠真実の理が治まれば、常に変わらぬ喜びに満たされ、おたすけの喜びを味わわせてもらえます。

人がたすかった感激、そして、何よりも親神様・教祖がお喜びくださっているという喜び、おたすけの喜びは、何物にも代え難い、道を通る者の喜びです。

そして、その喜びは、一人に止まることなく、家族・隣人へと広がっていき、土地ところの陽気ぐらしの姿となって現れてくるのです。

よふぼくが世界の各地でたすけに歩む姿を、親神様・教祖は心楽しみにしておられると思います。

▼三年千日に向かう心構え

今日、世の中は、新型コロナウイルスの猛威はまだまだ収まらず、また、近年、地球温暖化による異常気象や天変地異は、大変な被害をもたらしています。

親神様の思召に反した、自分中心の他を顧みない行動は、争いごとを引き起こし、世の中に陽気ぐらしとは真逆の不幸をもたらしています。

こうした世の中に見せられる事象は、親神様の残念な思いを現されたものと仰せられますが、道のうえからも、かんろだいの事情や真柱様のご身上、名称解消のお運びなど、年祭活動を前に、厳しいお仕込みを頂戴しています。

真柱様は、年頭に、

安心して御用ができても、できなくても、時間は同じように過ぎていきます。できないのはコロナのせいだというようにせずに、与えられた条件のなかで、やらなくてはならないことをいかに進めるかということを、いまの時旬を考えて、それぞれのつとめを果たしていっていただきたい

（みちのとも185年2月号7頁）

と仰せられましたが、このような社会の混迷が続く今こそ、私たちよふぼくの真価を発揮するときです。

世界・世の中の治まる真実の教えを、自分を取り巻く身近なところから、世界の人々に伝え、広めるため、よふぼくは、まず教会にしっかり心を繋ぎ、親神様・教祖に心を繋いで、おたすけに立ち上がらせていただきましょう。

教会は、世界だすけを推し進めるうえで、なくてはならない拠点です。教会の活動は、親神様の教えを伝え広めることです。国々処々の教会の動きが活発になり、悩み苦しむ人々にとって、心安らぐ場所となり、土地ところの陽

気ぐらしの手本ひながたとなれるように、会長を芯として、寄り集う人々が、心を合わせ、たすけ合い、陽気ぐらしの雰囲気を作り出していくのです。

教会は、昔から、身上事情に悩む人、身寄りのない人、あるいは、布教専従を志す人たち、様々な人を受け入れて、たすけ合って歩んできました。教会というたすけの道場に、よふぼく一人ひとりのたすけ心が繋がり合い、大きなおたすけの輪、陽気ぐらしの輪を作り出してきました。

いよいよ明年より、教祖140年祭に向かっての三年千日の活動に入りますが、先人たちは、「教祖の年祭」を、成人の旬として、教祖の親心にお応えしたい一念で、つとめ果たしてこられました。

私たちよふぼくにとって、「教祖の年祭」は、成人の足取りを進める掛け替えのない節目・仕切りです。

どうでも一つ、仕切り根性、仕切り力、仕切り智慧、仕切りの道、どうでもこうでも踏まさにゃならん。

（明治40・5・8）

と仰せられます。

よふぼく一人ひとりが、三年千日、仕切ってひながたの道を通る決意を固めたいと思います。

難しい事をせいとも、紋型無き事をせいと言わん。皆一つくのひながたの道がある。ひながたの道を通れんというような事ではどうもならん。（中略）ひながたの道より道が無いで。何程急いたとて急いだとていかせんで。ひながたの道より道無いで。（明治22・11・7）

と仰せられますが、教祖はご自身がお通りくだされた50年のひながたの道を三年千日、ただひたすらに実践すれば、深く大きな親心を持って、私たち子供の足りないところを補い、50年の道を通ったことと同じ理に受け取ってやろうと仰せられます。

よふぼく一人ひとりが、三年千日、仕切ってひながたの道を通る決意を定め、その心準備を今日まで進めてきましたが、いよいよこの10月、「諭達」が発布され、来年から三年千日の仕切りが始まります。

よふぼくが、どんなことからでもおたすけに立ち上がることを誓わせていただきたい。

周囲に心を配ることから始めて、勝手や方法にとらわれず、いつもどこでも進んで声を掛け、繰り返し繰り返し、根気よく、にをいがけの習慣を身につけて、身上・事情に苦しむ人、悩む人があれば、たすけの手を差し伸べる。おつとめに世の治まり、人のたすかりを願い、病む人には真実込めておさづけを取り次がせてもらい、悩める人の胸の内に耳を傾けて寄り添ってをやの声を伝え、心の向きが変わるよう導き、願わくば、ともに人だすけに向かうまでに丹精したいと思います。

心を合わせ頼もしい道を作りてくれ。あれでこそ真の道であると、世界に映さにゃならん。

（明治35・9・6）

と、存命の教祖にお喜びいただけるよう、共々につとめさせていただきましょう。

詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、２日前までには、必ず詰所へご連絡ください。

・食事をしない（宿泊のみの）場合でも、２日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。

委員部長後継者講習会 開催

10・23 大教会 婦人会

婦人会笠岡支部（上原きよ支部長）は10月23日、大教会で委員部長後継者講習会を開催、初参加の人も含む9人が受講した。

同じ立場をいただく者が年に一度、顔を合わせて成人の糧とさせていただこうと毎年開かれていた講習会だが、コロナウィルス感染拡大のため、3年ぶりの開催となった。

上原支部長はおはなしの中で「かしもの・かりものの教理をしっかり心におさめさせてもらうことが大事で、どんな事も神様からのお与えものなので、自分にとって不都合なことも喜びにかえて理づくり、心づくり、徳積みを精一杯勇んでつとめてほしい。そして、三年千日の年祭活動について、今日の自分より三年後の自分が少しでも成人している姿を見ていただけるような三年千日の過し方をしてほしい」と話された。

2人の感話を聞かせていただいたあと、ワークショップで心も体もほぐされて、勉強させていただきながらも、笑顔あふれる楽しい時を過した。

コロナ禍での開催だったため、午前中で行事を終了し、先輩委員部長さんたちの心の込もった手作り弁当を受け取って解散した。

（常任委員　岡﨑和美）

おはなしに聴き入る参加者

緊張の後は、心身をほぐして解散

立教百八十五年 秋季大祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中島誠治
	岡﨑真一

講話	島村廣義先生

賛者	浅野明教
	佐藤真孝
指図方	門脇元教

十二月講話	上原繁道

役割＼区分	坐り勤	前半	後半
地方	佐藤道孝	上原志郎	岡﨑真一
	中村道徳	森本忠善	田林久嗣
	中村義太郎	浅野明教	上原繁次
おつとめてをどり	大教会長様	門脇元教	田中隆之
	前会長様	三島　渉	今川昌彦
	上原繁道	山野弘実	横山逸郎
	大教会奥様	谷内美知子	武内正美
	前奥様	吉岡八恵	横山小智榮
	田中ますみ	山野なつ	室　悦子
笛	上原浩	佐藤真孝	浅野明教
ちゃんぽん	中村剛	高木昭祥	岡田　誠
拍子木	吉岡壽	虫明立生	渡邉隆夫
太鼓	中島誠治	岡﨑真一	岡﨑治喜
すりがね	谷内伸自	山田敏教	中村道徳
小鼓	武内清明	赤木素志	上原　浩
琴	上原順子	岡﨑豊子	内海安子
三味線	門脇加津	笹尾一美	中村初美
胡弓	佐藤香苗	三島照美	高木孝子

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます
親神様には 人間の陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召から この世と人間をお創造くだされたばかりではなく 十全のご守護をもって今も変わる事なくお見守り下さっております 加えて天保九年十月二十六日 旬刻限の到来と共に教祖をやしろとしてこの世の表にお現れになり よろづ委細の真実を明かし 世界たすけの道をつけて陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は 誠に有難く勿体ない極みでございます　私共は 御恩報じを念じて 届かぬながらも日々勇んでたすけ一条の御用の上に努め励ませていただいております
　その中 今日の吉日に立教の元一日に思いを馳せ ただ今からおつとめ奉仕人一同慶び心も一入に 明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて 秋の大祭を執り行わせていただきます　御前には今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供たちが 日頃のご高恩に改めて御礼申し上げると共に 立教の元一日に込められた親心に思いを致し 心新たに思召に沿い切る事をお誓いする真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
　さて本日は 世話人島村廣義先生の巡教を賜ります 時旬に当たってのおぢばの思いをお聞かせ頂き 今後の成人の歩みの指針とさせて頂きたいと思います　またいよいよ十月二十六日 秋の大祭にて教祖百四十年祭に向けて諭達がご発布されます　諭達に込められた思いをしっかりと受け止めさせて頂き 来年から始まる三年千日と仕切っての年祭活動を勇んで通り切って 年祭の日を成人した喜び一杯の姿で迎えられるよう 努め励ませて頂く所存でございます
　何卒親神様には どんな中でも親の思いにお応えするべく たすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受取り下さいまして 神人和楽の陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

福山分教会創立130周年記念祭

秋季大祭に合わせて勤められた福山分教会創立130周年記念祭は、感染予防に配慮し間隔を開けて179人の参拝者と共に厳かに勤めさせて頂いた。

挨拶に立たれた大教会長様は、初代の心に立ち返る事に触れ、また、秋季大祭の意義から、それぞれが自身のたすけ心を確認することが大切ではないかと話された。

続いて、福山分教会長が今日までの真実に感謝を述べながら、法面工事の際には、工事をする者、教会の掃除を担う者、また、手作りお菓子、料理の差し入れをする者、ひのきしん者の食事作りに心楽しむ者など、個々に真実を寄せて下さった福山らしいあり方に心頼もしく嬉しい思いがしたと述べ、今後も福山らしく仲良く助け合って今年を勤め切り、明くる年から始まる教祖140年祭の活動に精一杯勤めさせて頂きたいと締めくくった。

その後、雅楽による「もののけ姫」の演奏、天理大学生によるドラムパーカッションとダンスパフォーマンスで会場を盛り上げ、続いて、和牛肉・コードレス掃除機・台湾からの帰参者の手土産などの抽選会が行われ、弁当を配布して記念祭を終えた。

昼食後、部内教会ごとにご挨拶に伺い、お流れを頂戴して、親しく和やかに声をかけて頂いた。

年祭活動を来年に控え、成人を誓う有意義な記念祭となった。

天理大学生によるドラムパーカッションとダンスパフォーマンス

【笠岡学生会の日】開催

11・6 大教会 学担

11月6日、「笠岡学生会の日～はじめの第一歩～」（笠岡学生担当委員会主催）が、大教会で開催された。この行事は、今年初めて結成された「学生スタッフ」の学生が、学担と会議を重ね、笠岡大教会につながる学生のために開催したもの。当日は、おぢばや関西近郊の学生も含む25人が参加した。

参加者は、「自己紹介スゴロク」、「クロスインタビュー」、「情報紙」などの班別グループタイムを通して、お互いの事を知り親睦を深めた。また、大教会敷地内を使って、「逃走中（鬼ごっこ）」が行われ、元気に走り回る学生の姿が見られ、大いに盛り上がった。

最後に、学生と共にプログラムを体験された大教会長様より、「神様に○（マル）をつけてもらえるような、人を助ける心を養っていって欲しい」と、挨拶があった。

参加者は、同じ笠岡につながる学生同士の絆を深めると共に、次の行事への参加を誓い合った。

（学担委員長　上原繁次）

We are 笠岡学生会！

班毎に盛り上がるグループタイム

敷地内に放出された
ハンターから逃げる

大教会だより

◎教人資格講習会（後期）修了者

立教185年11月10日終講

葦陽　笹尾孝治

この度、教会長を交替する事になり、今月、本部にてお運びを願い出た。

来年から教祖140年祭三年千日という旬に教会長就任奉告祭を執り行う事が出来るのは、とてもありがたい事だと思う。

今日まで、様々な出来事や気持ちの葛藤の中、不足に思う事もあったり、自分自身に自問自答を繰り返しながら、不安に思う事が多かったが、周囲の方々のアドバイスや協力の元、ここまでたどり着く事が出来、なお一層、自分の気持ちも改めて考える事もあって、更に頑張って行こうと決意した。

まだまだスタートラインに立つ準備運動に過ぎないが、自分の気持ちを強く持って、信者さんや周囲の人達と共に協力し合いたすけ合って、又、これから先、家族共々支え合って自分も努力する事を継続出来る様、邁進したい。

（う）

陽だまり56

まごの手救援ひのきしん

ビエン・J・K

今年の7月上旬、西日本を襲った豪雨は各地に甚大な被害をもたらした。筆者の住む倉敷市においても真備（まび）町で大水害が発生し、51人もの尊い命が奪われた。浸水地域は町全体のおよそ4分の1にも及び、約9千世帯のうち4千棟以上が浸水被害に遭った。

テレビや新聞、ラジオ、インターネットなどを通してこの水害が報道されると国内はもとよりハワイ、アメリカ、カナダ、香港、フィンランドなど世界各地からたくさんのお見舞いの電話やメールをいただいた。とてもありがたく感謝した。私の住む地域は幸運にも被災地より少し離れていたので大きな災害は起こらなかった。しかし、真備町やその周辺地域には、友人や知人がたくさん住んでいる。友人たちだけではなく他の被災された方々のためにも何かさせていただきたいと願っていた時、天理教災害救援ひのきしん隊が出動することが決まった。

その頃の気温は連日40℃近く、猛暑日が続いていた。年齢を考慮して心配してくださる方が大勢いたが、矢も楯もたまらず災救隊に志願した。救援活動で初めて被災地に足を踏み入れた時、言葉が出なかった。水はほぼ引いていたが、いつもの見慣れた風景が一変していた。私たちは、アルミ工場の水蒸気爆発による爆風と浸水という二重の被害を受けた地域で活動した。くたくたになりながらも何か人様のために直接役に立っているという喜びがあった。その後、8月には災救隊に再度参加した。壁の泥落としや天井の解体など結構危険できつい作業だった。体中泥だらけになり、ひのきしん後の充実した気持ちを抱いて現場から帰る途中、一般のボランティア方々が道の泥を除去している現場を通り過ぎた。そのとき、自分自身の微妙な心の変化に気づき動揺した。無意識に「我々はとても有意義なひのきしんをしているのだ。君たちとはちがう…」という上から目線で彼らを見ていたのだ。猛暑の中での活動を褒められ、感謝され、社会的にも高く評価されているうちに思い上がっていたのかもしれない。私はふと、ある情景を思い出した。（次号に続く）

陽だまり語録124　「陽気」H30・12月号より著者転載

続・まごの手救援ひのきしん

平成15年6月、天理教教会本部で「西境内地拡張整備ふしん土持ひのきしん」が始まった。教祖120年祭に向けての活動の一つだったと記憶している。重機を使えば短期間で済んでしまう土木工事を、人が「もっこ」を担いでするのだから、ビジネス的に考えればまことにコストパフォーマンス（費用対効果）の低い活動であると思う。しかし、そこには決してコスパいう考えだけでは計れない意味と喜びがあった。神様からの借りものである体を使い、おぢばのふしんに伏せこませていただいている喜びがあったのだ。ある夏の日、別席を運ぶために帰参した甥っ子とこのひのきしんに参加した。そこで私は、ある女性の姿を目撃して目頭が熱くなった。車椅子に乗った彼女は膝の上に白いハンカチを置き、その上に乗せた僅かな土を落とさないように大切に、何度も運んでいるのだった。これこそが信仰の喜びなんだと実感した。だから猛暑の中、被災地で真剣にボランティアに励む人たちのことを、たとえ一瞬でも見下した自分の心の驕りは、この行いをも笑ってしまうことなのである。なんという心の貧しい人間なのかと、自分を恥じた。

さて、岡山教区災害救援ひのきしん隊は第4次隊をもって平成30年7月豪雨被災地への救援活動を終了した。私は反省を踏まえて何か小さなことでも良いから支援をさせて頂こうと決心した。情報を集めて必要な物を必要とする方に届けること、かゆいところに手が届く「まごの手」のようなひのきしんをしたいと願った。すると不思議なことが次々と起こってきた。避難所などで使用できる一人用断熱シート200本、新品同様の家財道具や電化製品、驚くほどたくさんの新品の日用雑貨、食料品等、被災した方が直ぐに必要とされるものを無料で提供してくださる方々や、支援活動への協力金を寄付してくださる方々が現れたのだった。私たちはそれらの支援物資を必要とされる被災者の方々に届けるだけ、まさに「まごの手」のようなひのきしんができたのである。心を決めて動けば神様が働いてくださる、本当にありがたいなあと改めて実感した。

陽だまり語録125　「陽気」H31・1月号より著者転載